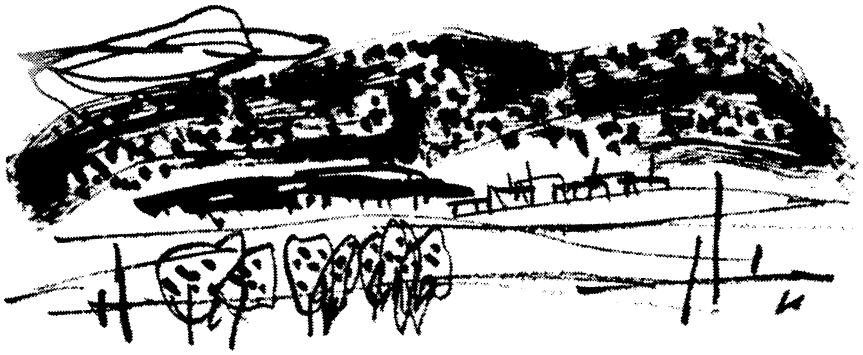
く様子など痛ましい限りでした。死の街と化した地域で三日間野営し乍ら遺体の収容、道路の修復などに従事しましたが、絶え間のないものすごい悪臭には全く参りました。食事も喉を通らずつらい思いで毎日を過ごしました。

被爆の翌日、アメリカ軍機が再び飛来し、伝単（宣伝ビラ）を撒（ま）いて行ったのを拾ったところ「被爆のあと、この土地には百年間は草木も生えない。早く今の無謀な戦いをやめなさい」と云つた意味のことが書いてあったのを記憶しております。三日間作業のあと四日目に駐屯地へ帰り、その後、九月中旬に復員するまで市内へは入らなかったのですが、殆んど全員が下痢、発熱に数日悩まされたのを覚えております。

終戦直後、アメリカ軍の航空母艦など数隻の艦艇が入港し、毎夜電光で満艦飾に飾り立てていたことが電気も水道も無いまま廃墟と化した市内と余りにも対照的だったこと。また復員のため長崎市駅へ集合した時、既に至るところで青い草が芽を出しており、復興に向って人々の立ち働く強い息吹を感じたことなど、複雑な思いを胸にして長崎に別れを告げたことを思い出します。

私も被爆者の一人として、被爆後四十九年を経過した今でも、あの悪夢のような惨状と亡くなられた方々のことを折りにふれては思い出し、このような悲劇を二度と繰り返すことは絶対にあってはならないと誓い、また祈念いたしております。